

「地平線 550 号で考える能海寛のこと」

タイトル	「地平線 550 号で考える能海寛のこと」
編集者名	江本嘉伸
雑誌名	能海寛研究会機関誌『石峰』
号	第 30 号
ページ	1—7
発行年	2025.3.15
E-mail	Sekihou@haz away.com(能海寛研究会)

ISSN 1883-4183



地平線 550 号で考える能海寛のこと

能海寛研究会顧問 江本 嘉伸

能海寛研究会が 30 年を迎えたという。『能海寛 チベットに消えた旅人』（求龍堂刊 1999 年）『まんが 西蔵探検家 能海寛』（南一平作画 原作・シナリオ 江本 2002 年）と能海寛に関する二つの作品を書かせてもらった者として万感の思いとともにお祝いを申し上げ、この機会にどうして私が能海寛という青年にかかわるようになったか、能海寛以外に私がどんな人間たちを追っているか能海寛研究会の未来への提言の意味もこめて書かせていただく。

■まず、チベットに行ってみた。

私がチベット世界を強く意識するようになったのは、1975 年初めて訪れたエベレスト峰へのアプローチの道だった。一緒に動いてくれたシェルパたちはチベット仏教を信仰しており、道中、チベット仏教寺院があり、その周辺で敬虔な仏教徒が五体投地を繰り返す姿にうたれた。1980 年には文化大革命以来禁じられていた外国人のチベットへの入域が初めて許された日本山岳会チョモランマ登山隊に報道隊員として参加した。

登山隊なので無人の尾根や壁、あるいは氷河がルートとなったが、そういう自然地形とは別に山麓（と言っても標高 4000 メートルに近い）の人々の暮らしぶりが心に焼きついた。機会があればチベットの人々の暮らしの中に入ってみたい、と思った。そうした矢先、日本映像記録センターの牛山純一さん（故人）から声がかかった。なんとチベット自治区に撮影チームを出すのが 1 人分席がある。いきませんか？という、願ってもない話だった。

文化大革命の火がようやく消えようとしていた。しかし、中国はダライ・ラマの権威をいっさい認めない強圧的な政治を展開している。そんな中でチベット人の多くは外では中国共産党に従うように装い、内実はダライ・ラマへの深い畏敬の心を持ち続けている。

1966 年に刊行された写真家、田村茂さんの写真集『チベット』は、せっかくチベット入りの機会を得たのに「新生・西蔵自治区―チベット小史」というわずか 5 ページの文章の見出しが「新生・チベットの夜明け」「たちあがった農奴・奴隷たち」「輝かしい発展の道」とされていることからわかるように、全編中国共産党讃歌に溢れている。入域の難しい憧れのチベットで取材できる機会を得たのになんとも惜しい、というのが私の読後感だった。

そんな中でチベットへの誘いである。新聞記者の肩書はなしに、ということで撮影チーム（通訳含めて 4 人）同行カメラマンの名目で私は 100 日間チベットの草原、街、僧院、森、を取材させてもらった。

素晴らしい体験だった。とりわけ東チベットに向かう旅の途中で出会った五体投地しながらはるかラサを目指す巡礼の姿に心を打たれた。標高 4000 メートルの高地を尺取り虫のように地に這いつくばり、立って祈り、また地に這いつくばる。巡礼に付きそうかたちで荷物を背負った同行者がおり、ラサまで 1 年かけて行く、と聞いて言葉もなかった。チベット仏教の覚悟者たちを見た思いだ

取材の成果は新聞で長期連載をさせてもらったほか『ルンタの秘境』（光文社刊）として 1 冊にまとめられた。1985 年には日本ヒマラヤ協会の企画、読売新聞後援で青海省のチベット文化圏、

黄河源流探検を実施、人と自然の素晴らしい世界をそこでも目撃、体験し、新聞紙面で大きく伝えたほか『ルポ 黄河源流行』（読売新聞社刊）を書いた。

こうした自身のチベット体験の中からはるか明治の時代、仏教が直面した問題から原典を求めて徒歩でチベット入りを目指した能海寛や河口慧海のなすとげてきたことが大きく立ちはだかってきたのである。

■「夜空のくろぐろした高原への夢」

私はチベットに向かった日本人をテーマに月刊誌『山と溪谷』に2年3か月の間、連載「『西藏漂泊 チベットに魅せられた十人の日本人』」を書き、その成果を上下巻の本とした。明治時代の能海寛、河口慧海、成田安輝、寺本婉雅、大正時代の矢島保治郎、多田等観、青木文教、昭和に入りの野元甚蔵、西川一三、木村肥佐生の10人が対象である。

当時、モンゴル取材をきっかけに作家の司馬遼太郎さんと知り合って間もない頃だった。何度か夕食会にお招き頂いたこともあり、できたばかりの『西藏漂泊』上下巻を、お送りした。すると丁寧な感想がハガキにぎっしり小さな字で書かれて送られてきた。

「明治末年から大正期にかけて西藏高原の神秘は、天を飾る銀漢とともに日本の知識人をとらえてふしぎな夢を見させてきました。そのことが学問になり、探検になり、ほんの一部では仏教学のテキスト比較（チベット大蔵経と漢訳經典との比較）になったりしました」

「いま忘れられようとしているとき、中国による侵略というリアリズムが日本にやってきましたが、日本人はいまひとつその現実にピンときてないようです。ひとつには昭和7年から13年間中国を侵略したという自責がなまなましいからでしょうか。それにしても明治末年から大正期にかけての、夜空のくろぐろした高原への夢はどうなったのだろうと思っていましたところ『チベットと十人の日本人』でした」

あの大きな作家が私のような者の仕事に丁寧な感想を書き送ってくれたことに感謝した。私はこの本の中でとりたてて新しい事実を発見できたわけではないのだが、司馬さんの文章でやってよかった、と思うことができた。

■浄蓮寺、野元甚蔵さんと西川一三さん。

この10人の中でただ1人帰らなかった能海という青年のことはとりわけ思いが深かった。すでに歴史の中での存在だったが、山口瑞鳳先生が毎日新聞出版文化賞を受けた『チベット』（東京大学出版会刊 上下巻）の中の「入蔵した日本人」の章で能海寛についての的確な文章を残してくれており、それをもとに能海寛という人間の一生を追うことになった。『チベット旅行記』ですでに世界に知られた河口慧海も十分興味深い人ではあったが、多くの研究者、ファンが彼の事蹟を追っていた。島根の農村で学び、数々の苦勞の末、何度もチベット目指しながら最後は妻の待つ故郷に帰ることのなかった学僧、能海寛のことは格別な思いがあった。

浄蓮寺を初めて訪れたのは1989年10月4日だった、と記憶する。隅田正三さんが『チベット探検の先駆者 求道の師 能海寛』を世に出した当時である。以後、波佐には何度も通い、懐かしい土地になっている。後年、2002年国際山岳年日本委員会事務局長をつとめた私は「日本に山の日を」という呼びかけを、山岳団体を通してしたことがあるが（結果として毎年8月11日が祝日「山の日」となった）いつもイメージとして頭にあるのは能海寛の故郷、波佐の風景であった。どこか穏やかで安心させられる土地、日本人の大事なものが持続している場所、と私には思

えたのである。

昭和のお3方には幸い、直接取材させていただくことができた。中でも鹿児島島の農協職員だった野元甚蔵さん、盛岡で「姫髪」という理美容材卸し業の店を出していた西川一三さんとは特別に親しくさせていただいていた。西川さんは、毎日午後5時以前は仕事一筋で誰とも会わない。

しかし、会うと決めたら2合のお酒で心を開いて遠い昔のモンゴル、チベット、インドでの話を存分に語ってくれた。

『西藏漂泊』を刊行し、出版記念会を開いた際、お2人は特別ゲストとして登場していただいた。ご家族ともおつきあいが続き、お2人が逝去された時は、不詳私が参列者の前で送る言葉を述べさせていただいた。

■写真展と冒険フォーラム

いくらチベット行の意義が深くても、1世紀も前の旅人のことに関心を持つのはごく限られた人だけだ。隅田さんや岡崎さんたちが、あれこれ苦労したと同じように私も何かできないか、考えた。

その一つが1998年3月に、ときわ会館で開いた写真展『地平線発—21世紀の旅人たちへ』である。東京を手始めに、各地で開催した写真展で、もともとの企画者であった「ノヴリカ」の影山幸一・本吉宣子夫妻に足を運んでもらい、地平線に縁の深い冒険家、探検家たちの撮った写真パネル229点を8日間展示した。

また、この年7月には「旅と冒険フォーラム」を2部形式で開催、1部は、私と野元甚蔵さんとの対談、2部では東チベットに何度も入っている中村保、アフリカ・リヤカー旅の永瀬忠志、島写真家の河田真智子さんに登場して頂き、旅の真髓について語ってもらった。

そして10人の中で最も純粋に仏教の本質を求めてチベットに向かったのが能海寛だった。彼がチベット探検を実施するまでの周到な計画、語学の習得など特記することは、いろいろあるが私は能海が実に誠実に記録し続けていたことに感動する。「春秋日記」など時にはスケッチ入りで書かれた日誌は生き生きとしていて明治の青年の息遣いまで聞こえてくる。『西藏漂泊』で書いた10人とは別に能海寛に関しては、結局、1999年になって『能海寛チベットに消えた旅人』（求龍堂）という本を書いてしまった。波佐で賑やかに澄田信義県知事まで出てくださった出版記念会をやったことは良い思い出である。



『旅と冒険』フォーラム 1998.7.12



能海寛チベット壮途100年記念写真展 1998.3.7～15

■能海寛記念 100 キロマラソン

私は長く現役でいたい、との思いから 40 歳になって毎日ランニングを始めた。そして、チベットの高地だろうがモンゴルの草原だろうが北極の氷原だろうが、「毎日 10 キロ走る」ことを自分に課した。能海寛の故郷を訪ねても必ず付近の森や畑やバス道を 10 キロ走ることを日常とした。フルマラソンを 3 時間そこそこで走れるようになって以後は、「超長距離の世界」に目覚めた。といっても 100 キロがいいところだが。ウルトラマラソンで知られる長年の友人、海宝道義さんの主催する「100 キロ遠足（とおあし、と読む）」では四国のしまなみ海道を中心とするコースを毎年のように走っていた。

100 キロは確かに長いが、独特の達成感がある。明治の昔、チベットに消えた青年の志をかみしめるために能海寛のふるさとで実行できないだろうか、と思いついた。海宝さんが本気となり、こうして、健脚であった能海寛にちなんで 2003 年、「能海寛のふるさと 100km ウルトラ（とおあし）試走会」翌 2004 年、2005 年に「能海寛のふるさと 100km トレイル遠足（とおあし）大会」が開催された。へとへとになりつつ、私はいずれも完走した。夕闇が迫る時間、熊との遭遇がこわかったが、昔の人はこの程度は歩くのが普通であったろう、と言い聞かせながら。



まんが『能海寛』出版祝賀会
(江本嘉伸・隅田正三・南一平)



第1回トレイル大会前夜祭
(江本嘉伸・海宝道義)



第2回トレイル大会江本ゴール

■立見が続出した日本人入蔵 100 年企画

2001 年は能海寛、河口慧海がチベットを目指して百年にあたった。私は仲間たちと「チベットと日本の百年 十人はなぜチベットをめざしたか」というフォーラムを東京・青山の東京ウィメンズプラザで開いた。山口瑞鳳、金子民雄、貞兼綾子、渡辺一枝さんらチベットについての見識の深い人に加え、多田等観の三女、明子さん、矢島保治郎の長女、仲子さん、そして島根県から能海寛研究会の隅田正三さんら日本人チベット行に縁の深い人々が駆けつけてくれた。

もちろん、最高に盛り上がったのは鹿児島県から娘さんと駆けつけた野元甚蔵、岩手県から参じた西川一三さんのお 2 人の話だった。進行役の私とともに長時間にわたるお 2 人の話は聴衆を引き込み、素晴らしい反応だった。250 人収容の会場は 500 人を超える参加者で埋まり、なんと半分近くの参加者は立見だったことが懐かしい。そうそう、交通費や会場使用料などモンベルの辰野勇さんから支援を受けての企画だったことを付記しておく。

■地平線会議のこと

以下は、能海寛と直接関係はないが、どうして私がチベットに通う旅人たちに惹かれたのか、能海寛研究会の皆さんには知っていてほしいことを書く。

浄蓮寺を訪ねた年の 10 年前、私は大学探検部、山岳部の仲間たちと日本の若い旅人、冒険者たちをつなぐネットワークを立ち上げよう、としていた。1979 年 8 月 17 日、大学探検部、山岳部

OB、OG、フリーの冒険者たちが当時住んでいた東京・四谷の我が家に集まり、徹夜で議論して「地平線会議」という名前を決めた。友人の宮本千晴（旅する民俗学者、宮本常一の長男）が提起したこの命名、いまでも的確だったと感じている。

一体何を目的としたのか。1979年11月20日付けで出した「地平線会議趣意書」は、以下のよう書き出しているが、実は半世紀を経て、今や若者の中で海外へ飛び出す情熱はかなり醒めてしまっているらしい。

[日本列島そのものも含め、地球上を歩きまわる日本人が、いまほど積極的、かつ広範囲にその軌跡を描いている時代は、なかったでしょう。たとえば、三百五十二万人。昨年1年間に海外へ飛び出した、日本人の数です。渡航が自由化された三十九年当時、十二万人であったことを考えると、これは大きな変化であると言えます。

一つのエクスペディション、一つの冒険の旅を出すために、しばしば何年がかりの手続きを必要とした十数年前までと違い、人々はかるやかに島国から飛び出していきます。パッケージ旅行で何かを発見する人、極地に住みついたまま帰っていない人、ラクダの背で砂漠を横断する人、いかだやカヌーで大河を下る人……。思い思いの発想と目的で、ユニークな地球体験の時代がこの日本に始まっていると、われわれは考えます。

そうした状況を背景に「地平線会議」という名の運動体を発足させました。日本人の探検、冒険、手作りの地球体験をできるだけ知り、可能ならばその行動の軌跡を記録にとどめておく。そして、関心のある多くの人々のコミュニケーションをうながし、これから飛び出そうとする人たちに何かを還元してゆきたい。それが大ざっぱに言った発足の趣旨です。]

この趣意書を実行するために以下のことが決まった。

毎月報告会を開く。その告知と報告のために「地平線通信」を発行する。それとは別に探検冒険年報『地平線から』を毎年刊行する。

最初の報告会は1979年9月28日、三輪主彦による「アナトリア高地から」。以後今日まで45年あまり、地平線報告会はコロナ禍で3年お休みしたがその後復活し、今に至っている。

地平線通信はつい先日出した550号（2025年2月号）までコロナ禍の最中も1号も休まず刊行し続けている。最近では20ページを超えることも普通で、毎月最後まで読み通すのが大変だ、もっと薄くして、との苦情が寄せられるほど情報満載だ。意外に知られていないが、その全てが実は無料で地平線会議のwebで読める。だから海外にいる旅人がごく普通に毎月の地平線通信を読んでいるのだ。また、報告会には参加費500円を払えば誰でも予約なしに参加できる。

■朝日新聞一面トップ

私たちは、この活動の宣伝はこれからはしない。関心のある人が嗅ぎつけてくるのが重要、と考えているからだ。ただし、毎月必ず地平線通信を発行し、必ず地平線報告会を開いてきた。その点では能海寛研究会のように地味な存在だが、たまに注目されることもある。2021年3月3日の朝日新聞夕刊（ちょうど4年前だ）には驚いた。なんと一面トップで、でかでかと「ユニークな「地球体験」触れる醍醐味 地平線会議会報誌500号突破」とほぼ全紙面をつかって地平線会議のことを伝えてくれているのだ。

「登山家や冒険家を中心に『日本人の地球体験の共有と記録』を掲げて始まった『地平線会議』の会報誌が新型コロナウイルスの感染拡大で海外渡航難しいなか、発行500回を超えた。結成から40年以上続く会は、ユニークな体験や価値観共有する場となってきた。会報誌は、コロナ

禍の日本や世界各地の暮らしを記録し続けている」

そして、この記事では報告会にこれまでどんな人たちが登場してきたかについて触れている。

「海難の死者を減らそうと太平洋で漂流実験をした人（江本注・「へのかっぱ号」の命懸け漂流で知られる斉藤実さんのこと。1981年11月「へのかっぱ号の漂流実験」報告者。故人）」「都心であえて野宿する」（「野宿野郎」を主宰する加藤千晶さん。2010年11月「歩いて野宿して歩いて野宿して青春して野宿！」報告者）「津軽三味線奏者で全国を巡る人」（車谷建太君 2024年12月「よされ三味の音（ね）流れ旅」報告者。普段は地平線通信 600部の印刷を一手に引き受けてくれている）「東日本大震災で被災した農家」（南三陸の佐藤徳郎区長。2013年3月「極限のリーダーシップ」報告者）カナダで鯨漁をする漁師（高沢進吾 2024年3月、「鯨の海へ里帰り」報告者）

「10年以上野外で用を足してきた人」（糞土師の異名を持つ伊沢正名さん。もう25年大便を水に流さず、野糞を続けている。2010年4月「糞土師は地球を救う？」報告者）

このほか世に知られた報告者として関野吉晴、角幡唯介、高野秀行、賀曾利隆、服部文祥、三浦雄一郎、石川直樹といった顔ぶれが紹介されているが、実は私たちが目指しているのはむしろ無名の旅人たちである。直近では2025年2月21日、羊の“原毛屋”を自称する京都の本出ますみさん（66）による「羊をめぐる日本と世界」の報告が新鮮だった。24歳の時、オーストラリアの牧場で羊毛の手紡ぎに出会い、羊毛を商う「原毛屋」に。「羊はヒトの衣食住全てをバランスよく支える点で他の家畜に抜きん出ている。西欧や中央アジアなど乾燥地帯の文明と不可分の存在。対照的に羊に頼らず生きてこれた、ニッポンの特殊性が見えてきます」本出さんが語ったことはあらためて羊という生き物が存在する意味を教えてくれた。

■8000メートル14座登頂

地平線会議を長く、それも青年たちを大事に考えながらやってきて、よかった、と思う瞬間がしばしばある。たとえば昨年11月の地平線通信547号のフロント記事を（ウェブで）読んでほしい。フロントとは毎月の通信で私が書く巻頭言みたいなものだ。この号のフロントはこうしている。

「石川直樹君から8000メートル14座登頂」の原稿がきのうギリギリに届いた。「原稿遅れてすみません。原稿とは関係ないですが、11月17日NHKスペシャルに出演します。ぜひご覧ください」とのメールをつけて。超多忙であろうに地平線を大事にしてくれる青年（あ、もう47歳か！）に感謝。石川君原稿は、16、7ページ「今月の窓に」

石川直樹とは彼が、はたちの早大生の頃に知り合い、ずっと地平線仲間である。報告会には何度も出てくれているが2024年1月「天辺をめぐるあれこれ」で久々に報告者として登場した。もう50歳に手が届く年齢になった石川がなんと8000メートル峰全山に登ってしまうという。「14座登頂」はそのフィナーレみたいなものだが、登山家でも冒険家でもない、という彼の真髓は登頂した8000メートルを写真集で表現し続けていることである。うーむ。挑戦する若者は育つな。

■はがきを書けますか？

私は18歳で大学山岳部に入り、自分の体重の荷を背負い、テントを張り、火を焚き（当時は、火器は雨の日しかつかわなかった）、雪上訓練に耐え、岩場にしがみついた。2年、3年部員となるときこの自分を見る思いで新人を鍛えることに情熱を燃やした。それとはかなり違うことかもしれないが、いまま地平線会議をやりながら若手がいかに育つか、が最大の関心事である。

SNSでは届かない言葉の世界、とでも言ったらいいのか。とにかく毎月原稿を書く若者を探し、報告会の候補者をゆっくり絞り込んでゆく。38歳で始めた地平線会議、通信は550号を数え、代表世話人の私（会長ではない。あくまで世話人の1人だ）は84歳になった。幸い、いまのところ、原稿に困ることはないし、人に困ることもない。

若い人を地平線会議に引き込むには多少のアイデアと努力が必要だ。こんなこともある。

世界がコロナ禍に入った2020年、頼まれて九州大学のオンライン授業を担当した。200人ほどの学生に地平線会議のこと、チベット、モンゴル、ヒマラヤのなどを2時間話したあと最後にお問い合わせしてみた。

「私の話に興味持てたらはがき1枚書いてください」

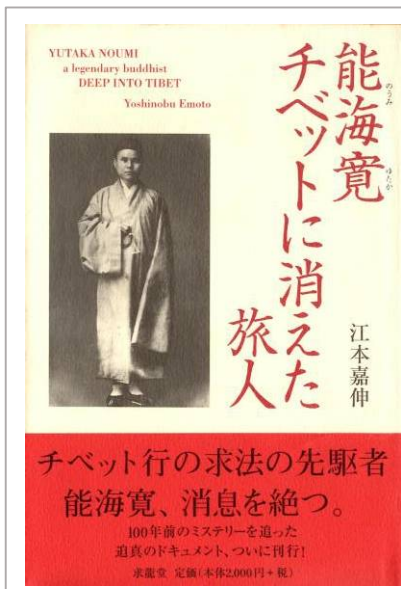
スマホが全ての今時、はがきなんか書くわけない、と友人たちは冷ややかだったが、来ました。それも2枚。

そのうちの1人18歳だった女子学生は、いま九大修士1年になった。毎月地平線通信を読みっており、しばしば原稿も書いてくれる、今や大事な仲間だ。西穂の山荘でアルバイトし、ネパールトレッキングを試み、昨年暮れにはアイスランド短期留学から帰ったばかりのその彼女に近く地平線報告会の報告者になることを、お願いをしている。「私などが・・・？」と控えめに引き受けた彼女、「地平線と出会って人生が変わってしまいました」と微笑む。

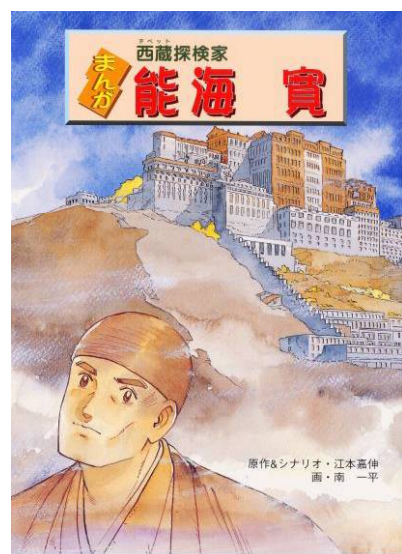
能海寛のいた時代から1世紀半。我田引水と言われそうだが、高年齢化が著しい日本で地平線は一つの指針ではないか。

若者の人生を変えてみようではないか。

そう、今も私は考えている。(了)



『能海寛チベットに消えた旅人』



「まんが『西蔵探検家 能海寛』」



最新の「地平線通信」No.550